『季刊 教育』一九五〇年二月（東京教育大学）

実態調査の理論

―社会調査と児童調査について―

矢口 新

【一】

実態調査に基いて、カリキュラムを構成しようという考え方は、教育実践に於ける新しい考え方である。何故カリキュラム構成に実態調査が要求されるのであろうか。実態調査といっても簡単に言えば現実の実態をみることである。ただその見方が組織的、科学的であるということに過ぎない。元来、実態をみるという事は如何なる形のカリキュラムであっても必要な筈であって、従来の教科課程に於ても、これは全く無視されていたわけではない。併し従来のカリキュラム構成の場合にあっては、学問体系、知識体系を基本として学科若しくは教科内容の編成をすればよいと考えられたために、比較的現実の実態をみることが等閑視されていたのである。

カリキュラム概念の変革に伴って、生徒の生活の全面をカリキュラムの対象として考えようとして来た為に，現実の生活実態が大きく問題とされるに至ったのである。知識を与えるのがカリキュラムの基本的任務だと考えられるならば、与えるべき知識の検討をすることが最も大切である。併しその場合でもその知識が受けとられ得るかどうかについては、生徒の実態に基いて考慮がなされる必要があろう。そこにやはり現実の実態をみることが必要であるが、こういう程度の必要性の認識からは現在我々が問題にしているような実態調査という要請は生れて来なかったのである。

所がカリキュラムとは生徒が自らの生活を営んで行く過程であり、その経験の系列であると考えられるに至ると事情は変って来る。生活の営まれる現場や、その生活を営む主体の意識が生活を決定するのであって、いわば生活とは環境と人間との緊張関係の連続である。而も生活はその人間の自主的な営みであって、他人に指示されて動くべきものではないのである。生徒のカリキュラムであっても同様であって、それが生活というからには教師にすっかりお膳立されて、それに従って動くということではあり得ない。やはり自らの自主的な営みでなければならぬ。そこで教師のあり方は指導という事が中心とならなければならない。教師の教育活動は指導という形で生徒の自主的な生活の全面に浸透して行くことになるであろう。即ち極めて内面的なあり方がとられるのである。或は生徒と教師との生活の共同といってもよいかも知れない。共に生活し共に問題にぶつかり共になやみつつ、共に問題を解決して、共に建設して行くのである。教師と生徒は生活の地盤を共にするのである。教師は常に自己と生徒が共在する生活地盤を見つめて、刻々と次の行動を生み出す生徒に有意義な指示と指導を時々刻々与えなければならぬ、生活カリキュラムとはこうして成立って行くものであろう。

現実の人間生活は現実の環境を深く見つめることに於て、より有意義なものとして成立つのである。そこに人間の自覚的形成があると考えられる。子供は子供なりに現実を見つめ、自己の生活を自覚的に営みつつ、己れ

を形成して行くのである。教師はその生徒の自己教育の営みに対する援助者、助力者である。教師は生徒の立つ現実を深くみつめるとき、自己の任務を正常に果し得るのである。実態調査がカリキュラム構成に於て要求される所以は正にここにあると言わなければならぬ。

　実態調査が如何なる地盤に於て要求されているかという事に対する認識は充分明らかにして置かねばならぬ。何故なら調査というのは現実把握の一つの手段であり、一定の形式をもった活動にすぎない。それは様々な目的に於て使用されることが出来る。現実を見るには見る視点が必ずある。この視点が如何に見るかを決定するのである。いわば視点が調査のあり方を決定する。従ってカリキュラム構成のための実態調査は現実をどういう点からみようとしているかを明らかにして置くことが是非とも必要である。それは社会に対する調査を行い、児童の実態を見る。だからといって、社会に対する調査が直ちに社会学的な社会調査であったり、児童を見ることが直ちに児童心理学的児童調査であったりするのはおかしい事である。

　現在カリキュラム構成のために調査を行うということは流行とも言い得るほど普及しているけれども、多くの調査は単に調査したというにとどまり、その結果が何程もカリキュラム構成に活用されていないのである。これはどういう所に欠陥があるかというと、調査という概念ですぐ一定の形式としての調査が考えられ、その形式だけで何の反省もなく調査内容が決定されるのである。社会に対する調査といえば社会学的な社会調査が形式として考えられるのである。それは本来社会学に於ける一定の視点をもった、現実把握の活動形式である。一定の構造をもっているのである。それがそのままカリキュラム構成に於ても無反省に用いられる所に問題があるのである。

　現実を見る視点を決定するものは現実の実践的課題である。教育実践の課題が教育現実をその角度から見ることを要請するというようにすべて現実に於ける問題把握の視点を決定してくるのである。問題が現実を把握する目の角度を決定する。如何なる方向からカメラを向けるかを規定するのである。そこから調査が如何なる形のものとなるかもきめられて来る。カリキュラム構成のために行われる調査には、この現実の問題が何であるか、そのために如何なる視点から現実をみるか。その見る方法としての調査の具体的な内容は何かという様に、現実を見る活動としてその目的方法に対する自覚がないのである。いわば非常に高度な技術方法が原始人に与えられているという形態なのである。これが実態調査をもてあまし、一応実施するけれども、真にカリキュラム構成に役立てる所に行っていない現状の根本的理由である。

　カリキュラム構成のために行われる実態調査は、生徒の生活設計のための現実把握なのである。社会に対する調査であっても、単に社会の静態や動態や構造や歴史を見ることではないのである。それは教師によって行われても本質的には生徒が自己の生活をどうすればよいか、如何に行動するかを決するために行われる現実把握としての意味をもっているのである。この生徒建設と関連のない所の単なる鑑賞的調査はカリキュラム構成には縁がないといわなければならぬ。併しかくの如き無意味な鑑賞的調査が如何に多く世の中に行われていることであろうか。

　生活の設計というものは具体的な場面に於て行われるものであって、Ａという人間の生活設計でなければならぬ。彼は或る社会に住む人間であり、或る過去をもち、将来を描く人間である。いわば彼は時間的、空間的存在である。彼が如何なる生活をなすべきかの設計は、この時空間的存在の中に於てのみ考えられるのである。それは他人とは異る構造をもっているのである。

　彼は或る意欲を以て刻々の行動を起すであろう。それは彼の具体的な環境に対する具体的な意欲であり、その意欲は彼がそれ迄に

生活することにより彼の中に形成されて来た意欲の仕方の表現である。而も彼は新な問題に向って刻々意欲しつづけることにより新な意欲の仕方、行動の仕方を身につけつつ新な環境を発見しつづけて行くのである。これが人間の形成である。この場合に彼が全く過去にのみ支配されて、一定の意欲行動の形式以外に出ることがなければ、彼にとっては世界は固定したものとなるであろう。それは動物の世界と何等変らない。繰返しの世界があるのみである。新な環境の発見もなく、自己の変化もないであろう。併しそういう事はないのが人間の動物と異る所以といわなければならぬ。人間は自ら求めて新しい行動者たらんとし、新しい環境を発見せんとしているのである。それは彼の発動力と受容力との交錯する所に営まれる。

彼が全力をあげ行動し意欲することが、同時に全力をあげて新しい世界を受け入れんとする事なのである。発動と受容は物の両面と考えられねばならぬ。

彼が全力をあげて発動しようとするとき、それが成立つためには、彼は現実をも全力をあげて受容しなければならぬ。その二つの方向の均衡が彼の具体的な行動として実現するのである。

彼が彼の生活即ち行動系列を設計するというのは意欲し発動することであるが、それは裏から言えば現実の環境とみることに於て、成立つのである。即ち現実が精細に見られれば見られる程、彼の行動もまたそれだけ充実することになると考えることが出来よう。これがカリキュラム構成に於ける実態調査の本質的意義である。即ち現実の実態をみることに於て人間はその生活を設計する。生徒も本質的にそうなのである。

併し教師が実態調査を行うのである。それは生徒にかわって教師が行ってやるという事にすぎない。そこに教師は生徒と共同の生活者として最初からあることを要求されているのである。

【二】

現在カリキュラム構成に於て行われている実態調査をみると大体三つの分野から成立っているように思われる。即ち教育目的設定のための調査、乃至地域社会の課題の調査といわれるもの、第二に社会調査、第三に児童調査といわれるものである。これらの内容をなすものは一般的に見て必ずしも一定していないけれども、問題はこれらの内容や形式が果してカリキュラム構成に於ける現実把握の本質的意義に照して、妥当なあり方をしているかどうかという事である。

生活設計のために現実を見るとしたならば何をどう見て行かねばならないだろうか。生活というのは一定の目的をもって貫かれた行動の構造機関である。我々の行動は刻々現れ次々へと消滅して行くけれども、それが一つの生活として把握されるのはそれらの行動が目的の体系によって構造づけられるからである。多くの場合我々はそれを明確に自覚していないけれども生活行動はこれがなければ分裂してしまうであろう。所でこの自覚が高まることによって、生活はより高度なものになる。そこにより高い段階への人間の形成もある。生活の設計とはまず第一に己れの行動の系列を目的の見地から明確化してゆく過程としてとらえることが出来る。

所でカリキュラムとは生活の過程を人間形成の過程として見た概念である。カリキュラムとはその意味で教育理念によって生活を見た言葉だと言えよう。従ってカリキュラムとは生活と実質的に異ったものでない。ただ教育理念によって系列づけたもの、乃至は教育理念の浸透という点から生活を見たものであるに過ぎない。所で教育理念とは何であろうか。それは人間の生活の現実が生み出した人間自身のあり方に対する意欲に他ならない。現実の人間の生活は様々な意欲の複合に於て成立つのであって一面的な理念的あり方をのみ追究して現実に生活が営まれることは不可能に近いのである。併しまた理念的な人間像が現実の生活の一面として存

在し、複合的な現実生活のあり方を一方から規定していることも見過すことは出来ない。

併し我々の教育という営みに於ては、人間像を目標として、人間の理念的なあり方を中核としてその生活を設計しようとしている。学校生活が理念的であるといわれるのはこのことである。この場合まず第一に要求されるものは、現実生活は如何なる人間像の理念を生み出しているかという事の把握である。それは生活理想の把握といってもよいであろう。いわば現実生活から、カリキュラムを浮彫りするためには、現実生活の人間的理想をとらえていなくてはならぬのである。カリキュラム構成に於て現実が見られるべきとしたらまず第一にこの点からであろう。こういう目的をもった実態調査は多くの学校や地域で教育目的設定のための実態調査として行われているものに略当るであろうが、然らばかくの如き意識の調査は一体どのような形をとるものであろうか。今詳細にその事を論ずる紙面を有しないけれども簡単にその事について考察してみよう。

生活の理想は人間とその環境との緊張関係という現実態の中から結晶して行くものであるとするならば――そしてそれ以外に考えることは出来ない――人間像といわれるもの、或は教育目的といわれるものについても同様に考えられなければならぬ。曾て我々の思想では教育目的の如きものについては、いわゆる上から規定されて来ると考えられた時代があったけれども、考えてみればそれは何等根基のない事と言わなければならぬ。それが言葉として語られる限り何人かによって語られたものであり、天来の妙音の如く響いて来たとしても依然として人間の世界の出来事であり、人間と環境との生活現実以外に地盤はない筈である。従って調査によってこれをさぐろうとすることは、やはり正しい方法であるといわなければならぬ。否かかる考え方こそまさに革命的な思考の方法として認識されなければならぬ。現実に基いて教育を成立せしめようとするならば、現実の中から教育目的を抽き出して来る方法を成立せしめることは極めて重要なことといわねばならぬ。

然らばその方法は如何にあるべきであろうか、現在は多くの調査が極めてずさんな世論調査方式をとっているけれども、かくの如き事で果して適切と言い得るであろうか。その細かい技術については今は到底問題にする余裕を持たないけれども、それ以前のより基本的な所に大きな問題がある。世論調査とは要するに人間の意識の側のみを問題にした事であるが、生活理想は単に人間の意識の側のみの問題でなく、いわゆる客観的な環境との交渉場面に結晶するものである。理想とは究極に人間の側のもつものであるけれども、而も単に人間の側のみで決することでなく、客観の関与する所である。そこに理想の発展もまた考えられるのである。如何なる客観的現実に於て如何に理想を抱くかが把えられて、はじめて現実的理想として実践を導くに足るであろう。そこで意識の側のみの世論調査でなく、客観的現実の側に対する調査が行われなければ、生活理想の調査とはならないであろう。

併し客観的現実の側の調査と主観の側の調査とか何等の関係がなく平行的に行われても、それでは調査の結果、生活理想を把握することは出来ないであろう。例えば、或る地域に於て、子供にどう教育したらよいかということに関して世論調査を行う。様々な世論、或は正直な人間、或はかくかくの能力を有する人間等と答えが出る。これは人間の側の意識である。さてこれと何等の関係なく社会調査が行われるとする。例えば家族構成、人口構成、産業構成、習慣調査等がある。また教育調査として一般的な教育事情の調査が行われる。この様な調査が併行して行われても現実的な生活理想を、或は教育目的を把握するには著しく困難を感ずるであろう。

そこで教育目的乃至人間像の把握の仕方は次の如き方式によって行われるべきであろう。まず第一に人間の意識の問題として、理想として抱いているものが何であるかが把

えられなければならぬ。それは理想とはまず何よりも人間の意欲の問題であることに於て当然なさるべき事である。それは世論調査の如き方式、或は加うるに意見の一致による方式等を用いてよいであろう。所でこれと社会の客観的現実と如何に結びつけるかが問題である。

さて我々は視点なくして客観をみることが出来ないのであって、純粋に客観的に見ているとしても、やはり何等かの視点から対象が見られているのである。この視点が漠然としている時、対象は明白に姿を表さないのである。この客観的現実をみる場合に必要な視点はいわゆる問題が生み出すのである。

客観的現実に於て生活理想を見ようとするならば、現実はその問題を視点として見られなければならぬ。従来行われて来たカリキュラムに於ける社会調査は一般にこの視点が全然漠然たるものであったのである。社会調査に於てもこの理想の観点が明白に把持されることが最も必要なことである。而してこの視点を与えるものこそ、まさに意識の側に対して行った調査でなければならぬ。その意味で意識の側に対する調査と、客観的現実に対する調査とは相伴うものであらねばならない。

所でかくすることは現実を見る視点を却って制約するのではないかという見解があるけれども、実は正にその反対であって、それによって自己の現実把握の立場を明らかにし、他との対照を可能ならしめ、より広い見地に立つ地盤を得ることになるのである。ただ如何なる場合もより広い立場に立って生活理想を考えるという態度が必要であるのは言うまでもない。

かくして、意識の側から見られた生活理想を視点として客観的現実の分析に入ることが出来る、その事は客観的現実にそれぞれの理想に照合されて把握されるであろう。即ち意識に於て把えられた理想が客観的現実からも成立し得るか否かが自ら明らかとなるのである。例えば正直な人間が望まれるという意識に対して、客観的にある現実は如何なる正直であり、如何なる不正直であるかということが把えられるのである。あらゆる生活場面に於てこの事がさぐられるなら、はじめて、正直という理想が現実に成立つかどうか、また何であるかを明らかならしむるであろう。これが具体的な人間像となるのである。

以上は教育目的の調査に関する基本的な点である。現在行われている教育目的の設定に関する調査はこの点で現実的地盤がないという根本的な欠陥を持っていると思われる。所で地域の課題の調査といわれる多くの世論調査が行われているのも、現在の流行であるが、この調査も本質的には教育目的の設定の調査である。

以上教育目的を、現実をみせることによって把握する方法についての基本的な考え方を述べたのであるが、カリキュラムの構成について基本となるべきこの教育目的設定について、極めて形式的なずさんな方法がとられている事が、カリキュラムを現在の如き観念的形態に置いておく根本原因であろう。何故ならば具体的な人間像が把握されない所に、具体的な生活の設計は営まれないからである。尚この問題についての様々な問題は雑誌『教育科学研究』の拙稿「カリキュラム構成のための実態調査」を参照されたい。

所で現実に於て具体的な人間像を把握しようとすれば、それは無限に具体化してゆくものである。そこまで社会的現実の課題を分析し、教育目的を分析して迫ってゆく過程が更に進んだ実態調査の過程である。

この方面の調査として活動分析、或は文献調査や観察質問書の調査など様々なものが考えられている。我が国に於ては極めて寂しい状況にあるが、アメリカに於ては一九二〇年前後に於て既に多くの調査が行われて、具体的な教育目的を社会的現実から設定しようとしているのである。これが如何に厖大な調査の領域を含むかは、例えば文字使用状況の調査、数量計算の使用状態の調査とか様々な職業活動に於ける知識や技能や態度の調査などあらゆるものを含むものであることを付言すれば足りるであろう。ともかくこれ

らの実態の調査が行われてはじめて真に教育の目的が――これは内容といってもよい――定まるというべきである。

【三】

さて実態調査は単に教育目的設定のためにのみ行われるものでない。以上は被教育者たる子供の側から見るならば、あくまで社会的地盤として、乃至は環境として客観の側に立つものである。その意味でこれを社会調査と呼ぶことも出来よう。

社会調査は被教育者にとってはまた自己の中にある社会性とも見ることが出来よう。或は個別的なるものに対して、一般的なるものとも言うことが出来よう。それは比喩的に言えば、教師によって自覚された所の生徒の感ずる社会的要求、或は制約である。そこで次には、生徒自らが自覚する所の生活理想としてこれが生徒の段階に於て把握されなければならぬ。教師がこれを把握することに於てはじめて、教師と生徒が共在し得るのである。その意味で児童を中心とする調査といえよう。いわゆる児童調査というのはかくの如く解さるべきであろう。

所で児童調査は社会調査と何等の関係なく行われる調査であってはならないのであって、一般に行われるカリキュラムの為の児童調査が多く従来行われた一般的な児童研究の児童調査であることは反省を要する点と思われる。カリキュラム構成に於ける児童調査は、前述の如く、社会の一般的要求の中に生活する児童が、それの地盤の中で自己と自己の環境とを自覚するプロセスとして本質的な意味をもたなければならぬ。それはただ教師によって行われるという事であるに過ぎない。

以上の様な意味に於てこの児童調査が行われるとしたならば、それは如何なる方式のものとなるであろうか。人間は何人も自己自身の生活理想をもって生活を設計している。併しその自己自身の生活理想は実は社会のもつ生活理想によって基盤を与えられたものである。それは社会的生活理想を自己のもつ客観的現実によって具体化したものとも言えよう。即ち社会的生活理想をもって自己の現実をみるとき、それぞれの自己を中心とする客観的現実の構造は何れも皆異っているのである。そこから具体的な自己の生活設計の理想と実践が生れるのである。さてこの関係は児童といえども本質的にはかわらないのであって、そこに児童の生活設計への現実把握という意味をもった実態調査の形態も決定される所以があるのである。

即ち児童調査に於ては、言いかえれば児童自らの自己の環境と自己の認識にはまず一般的な社会理想という視点がなければならない。それは教育目的として乃至地域の課題として把えられた所の生活理想である。即ち社会の生活課題による生徒の環境の分析、社会の人間像即ち教育目的による生徒の意識の分析、精神能力等の調査が児童調査の大きな分野である。

先ず第一に児童の生活環境の調査が行われねばならぬが、それは視点のあいまいな乃至何等の視点のない雑然たる環境調査でなく、社会的生活理想、乃至社会の課題が明白な視点となって環境分析が行われなければならない。

例えば社会の課題として、住宅問題があるとする。これは児童の環境にも何等かの形である筈である。言いかえれば児童の環境にも大人の環境にも住宅問題も意識せしめるような或る事態があるということである。その中で大人はこれを住宅問題という概念でとらえたけれども子供はこれを明白に意識しないか、或は他の概念でとらえているかも知れないのである。そこでその視点に於て児童の環境が調査されるのである。ここにはじめて社会とつながった児童の環境構造が明らかになるのである。ここに於て児童は児童としてもつ所の環境構造をとらえることが出来るであろう。かくして各課題について児童の持つ環境構造がさぐらるべきである。これは従来の如き漠然とした児童の環境調査と極めて異ることは明白であろう。

この環境は直接児童の意欲とつながるものである。そこでここを通路として児童の意欲を把握することが次に行われなければならぬ。これはいわば児童の生活課題意識である。而も如何なる客観的現実に対する如何なる意欲であるかを把えたものという事が出来よう。ここで教師は生徒の自主的な生活設計が如何なるものであるかを明白につかまえることが出来るのである。これがカリキュラムの為の児童調査の第一の部分である。

所で次にカリキュラムは具体的に経験の系列として展開しなければならぬ。具体的な経験が展開する地盤は、児童が具体的に現在如何なる人間であるかという点にかかる。而もその地盤に於て、いわゆる社会の要求する所の人間像を具体的に表現しなければならぬのである。社会は教育人間像として、正直な人間たることを或は科学的能力のある人間たることを欲しているならば、彼は現在の能力に於て、現在の具体的行動に於て、その限りに於て正直たることを、また科学的能力のあることを努めなければならぬのである。その如き具体的なる行動内容のあり方が如何なるものであるかが一つ一つさぐられて行かなければ．新に理想的にして具体的なカリキュラムとはならないであろう。

ここにカリキュラム構成の為の児童調査の第二の広範な分野が存在するのである。これは前述した所の社会調査の分野に於ける具体的な人間像把握のために行われる活動分析などに対応するものであって、一つ一つの具体的な行動に関して、即ち知識的な行動、技術的な行動、或は態度等について児童の現在の状態が如何にあるかを明らかならしむる調査である。これもまた厖大な領域であることは言うまでもない事である。

以上実態調査の構造を理論的に明らかにしたのであるが、カリキュラム構成のためにかくの如き実態調査が行われなければならぬとしたら、カリキュラム構成は不可能ではないかと思う人々もあることであろう。

まさにその通りであって、現在我々が考えているカリキュラム構成とはこの様な実態調査を予想だにもしていないのである。そこに我々のカリキュラム改造に対する根本的な認識不足があるのである。

カリキュラムは単に一ヶ月二ヶ月、乃至一年、否二年、否五年、十年程度の研究によって簡単に改造さるべきものでなくして、より大きな問題なのである。最近のカリキュラムでも形式のみは変化したかの如くであるが実質は依然として変化はしていないのである。アメリカはカリキュラム研究に入って既に五十年になっていることを考えてみなければならぬ。一九一〇年代に既に多くの社会調査や児童調査が行われる気運が生じて、今だにそれが着実に実施されているのである。実態調査によるカリキュラム構成はこの意味では革命的な意義をもつものである。厖大な社会組織と教育組織、生活の複雑化に応じて起った現実把握の新しい方式であって、このメカニックな手段が、やがて集積されて行くならば、それによりカリキュラムが根本的に改革される時が来るであろう。実態調査とはその様な意味をもったものである。現在行われているカリキュラムの為の実態調査は、本質的にはまだ確立していないといってよいであろう。

形式的な統計表つくりの実態調査、カリキュラムと殆んど関係ない調査等が多く行われている事、それが我々のカリキュラムが結局、従来の観念により従来の方式で構成され、実体に於て従来と大してかわっていない事を物語っているのである。

我々が極めて小規模でもよい、真実の意味に於て現実把握の実態調査を行い、それに基いてほんの小部分でもカリキュラムの改造を行うときにはじめてカリキュラムが一歩進展したと言い得るようになるであろう。その意味でたとえ如何に小さくとも実態調査が真に現実把握をするために行われることが、カリキュラムの改造に役立つことを思わねばならぬ。実態調査のあり方はカリキュラムのあり方を物語るのである。